

学習の可視化・多様化に関する研究会
2013年12月11日

フランス語学習者における **CEFR-J**を用いた自己評価と 客観評価との関係

杉山香織（東京外国語大学大学院博士課程）

川口裕司（東京外国語大学）

フランス語での取り組みの一例

学習の可視化に向けて

- CEFR-Jを基にしたcan-doの調査（自己評価）
- CEFR-Jを基にしたタスクの作成、調査（客観評価）

⇒自己評価と客観評価の関係性の分析

CEFR-Jとは

- CEFR(ヨーロッパ共通参照枠)⇒日本の英語教育での利用

(投野 2013: 92)

- CAN-DO =「何ができるか」を文章で明示

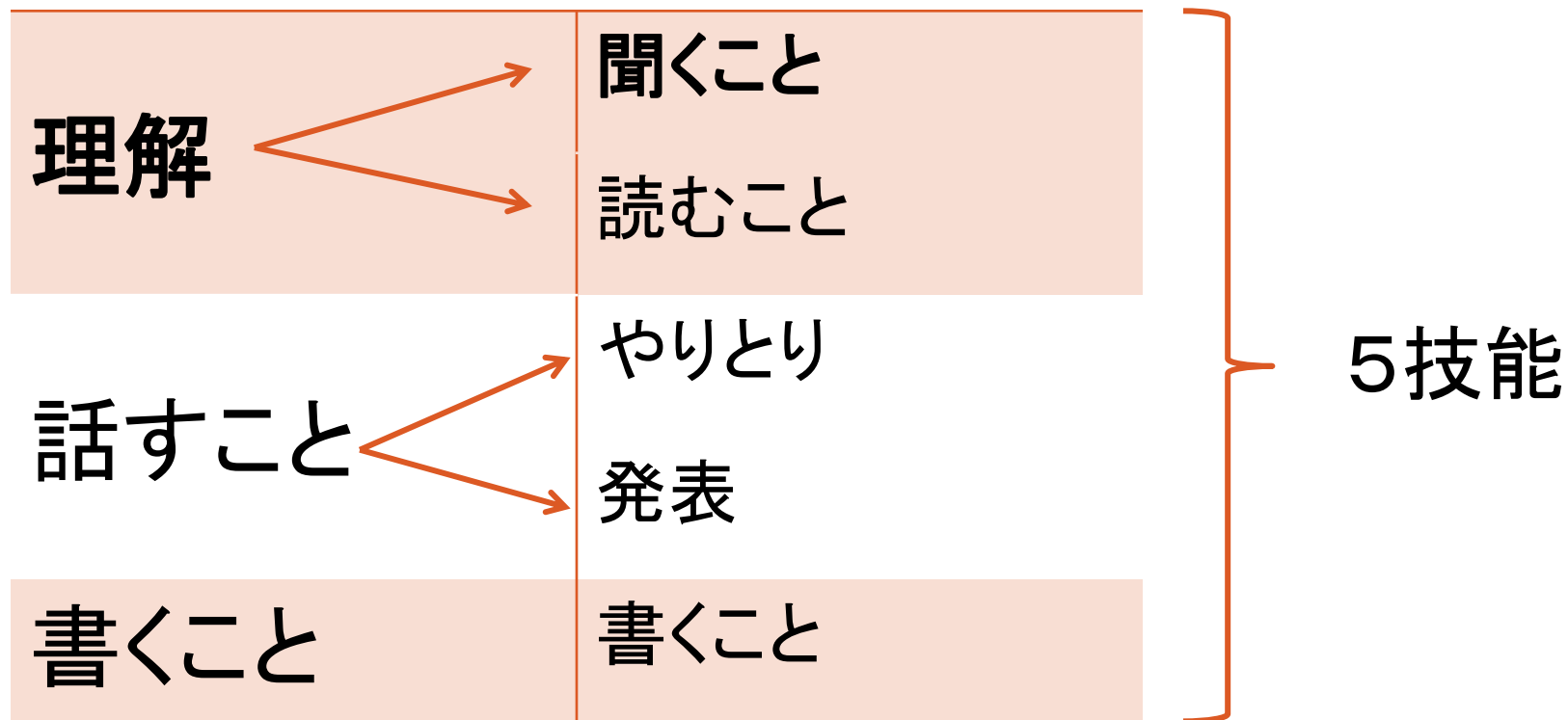
難易度は大規模調査を経て決定

- A1, A2, B1, B2, C1, C2

⇔ Pre-A1, A1.1, A1.2, A1.3, A2.1, A2.2, B1.1, B1.2, B2.1, B2.2, C1, C2

日本人の8割がAレベル(Negishi, Takada and Tono 2012)

CEFR-Jとは



preA1～B2.2まで⇒各レベルに2つのディスクリプタ

C1, C2⇒各レベル1つのディスクリプタ

=12レベル、計110のディスクリプタ

自己評価の方法

•CEFR-JのCAN-DOのディスクリプタ

①どのようなタスクができるか

②どのような言語の質でできるか

③どのような条件下でできるか

例: Pre-A1 理解(聞くこと)

「ゆっくりはっきりと話されれば、日常の身近な単語を聞きとることができる。」

(投野 2013)

ディスクリプタ

理解(聞くこと)

1. ゆっくりはっきりと話されれば、日常の身近な単語を聞きとることができる。
1. できる 2. ほぼできる 3. あまりできない 4. 全然できない
2. 身近なものであれば、文字が発音されるのを聞いて、どの文字かわかる。
1. できる 2. ほぼできる 3. あまりできない 4. 全然できない
3. 当人に向かって、ゆっくりはっきりと話されれば、「立て」「座れ」「止まれ」といった短い簡単な指示を理解することができる。
1. できる 2. ほぼできる 3. あまりできない 4. 全然できない
4. 日常生活に必要な重要な情報(数字、品物の値段、日付、曜日など)を、ゆっくりはっきりと話されれば、聞きとることができる。
1. できる 2. ほぼできる 3. あまりできない 4. 全然できない
.....

客観評価の方法

•タスクの作成

Crépieux, G.他 (2007) 『Spirale日本人初心者のためのフランス語教材』, Hachette.

Lescure, R., et al. (2007) *DEL F A2 200 activités*, CLE international.

Parizet, M-L., et al. (2005) *Activités pour le Cadre Européen Commun de Référence -Niveau A2*, CLE international.

Vannieuwenhuyse, B 他 (2012) 『Moi, je... コミュニケーション』, アルマ出版.

Veltcheff, C., Hilton, S. (2006) *Préparation à l'Examen du DEL F A1*, Hachette.

タスク

- 配布用紙を参照

データ取得方法

- 「理解(聞くこと、読むこと)」⇒多肢選択式問題
- 「話すこと(やりとり、発表)」⇒日本語で書かれた問題を読み、フランス語で答える
- 「話すこと(やりとり)」(一部)⇒フランス語の音声を聞いて、フランス語で答える問題を出題し、学生の回答をローカルPC上で録音
- 「書くこと」⇒日本語で書かれた指示文を読み、フランス語で回答を書く

データの数値化

・多肢選択式の問題⇒ 正解=2、不正解=1

・自由回答式 「話すこと(やりとり、発表)」、「書くこと」

⇒4. できている

3. ほぼできている

2. あまりできていない

1. 全くできていない



調査例：平均の比較

□ 調査対象

東京外国語大学学部1年生28名

フランス語学習歴約4ヶ月

□ CEFR-Jアンケート実施(7月23日)

□ パフォーマンス調査(10月4日)

研究手法

□自己評価とパフォーマンス評価の比較

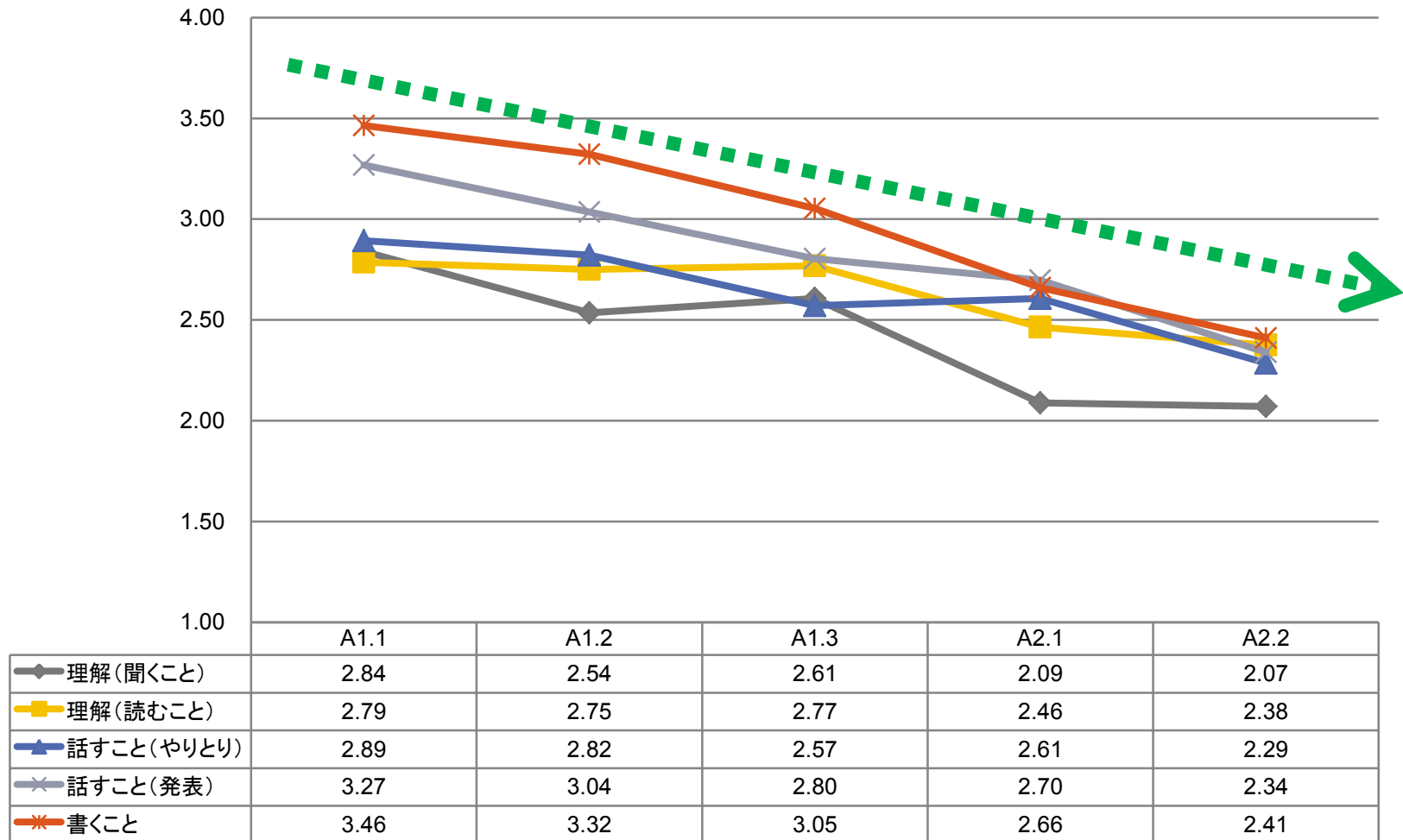
理解(聞くこと、読むこと)⇒多肢選択式問題

- ✓ 自己評価＝4段階評価⇔パフォーマンス＝2段階評価
- ✓ 自己評価を2段階評価に再編
(4.できる、3.ほぼできる＝2; 2.ほぼできない、1.できない＝1)

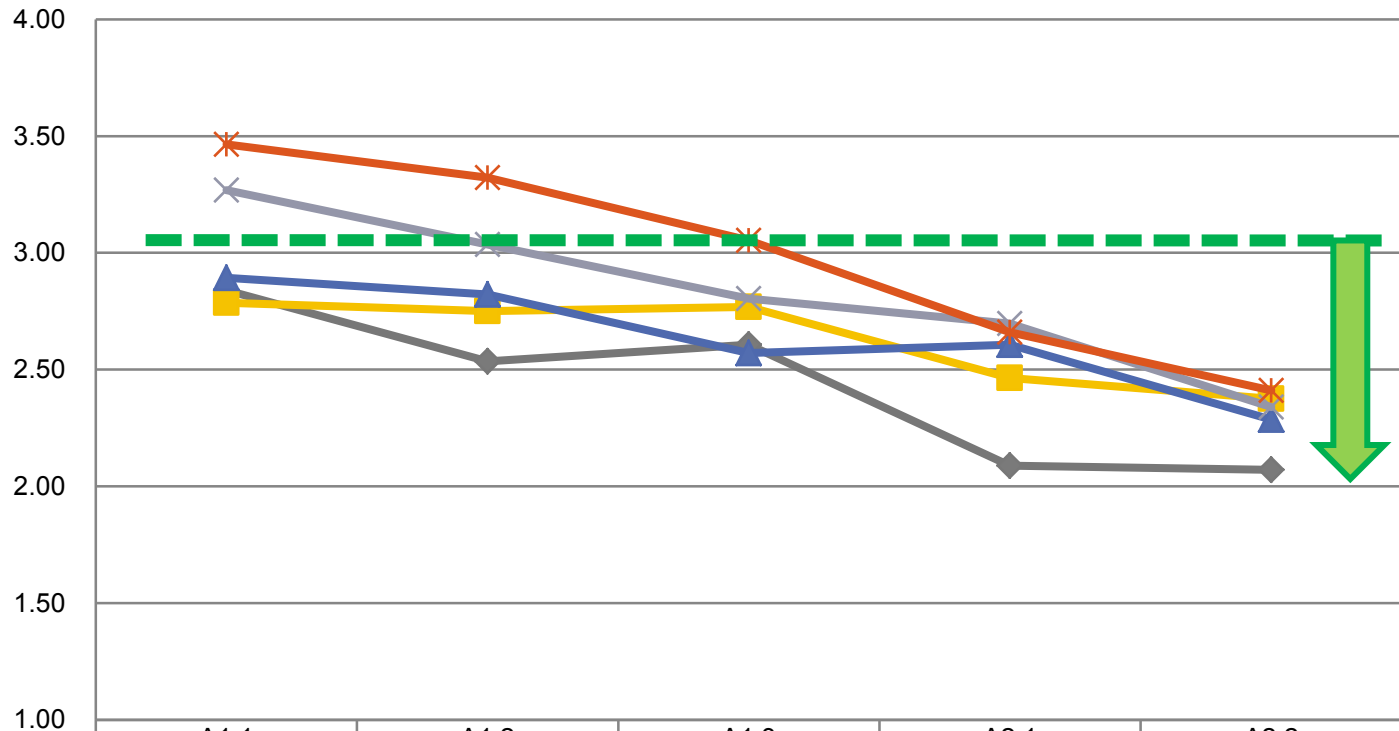
その他⇒自由回答

- ✓ 自己評価＝4段階評価＝パフォーマンス評価＝4段階評価
- ✓ 杉山が評価
(4.できた、3.ほぼできた 2.ほぼできていない、1.できていない)

研究の一例： 自己評価の平均



研究の一例： 自己評価の平均

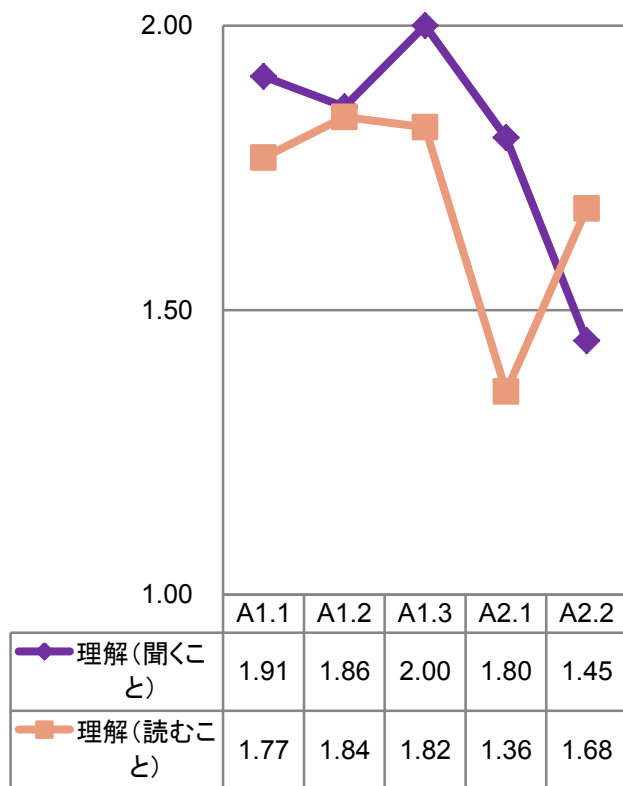


	A1.1	A1.2	A1.3	A2.1	A2.2
理解(聞くこと)	2.84	2.54	2.61	2.09	2.07
理解(読むこと)	2.79	2.75	2.77	2.46	2.38
話すこと(やりとり)	2.89	2.82	2.57	2.61	2.29
話すこと(発表)	3.27	3.04	2.80	2.70	2.34
書くこと	3.46	3.32	3.05	2.66	2.41

研究の一例： パフォーマンス評価の平均

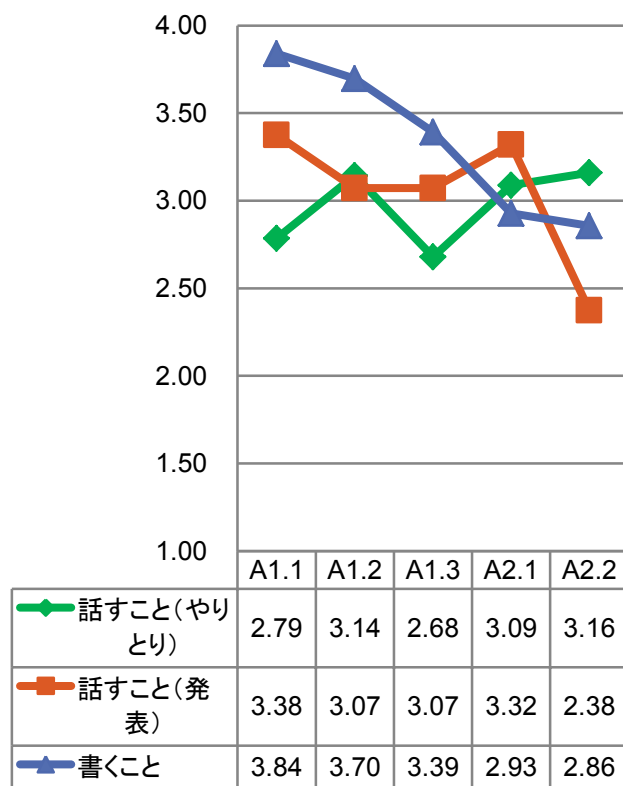
多肢選択式

理解（聞くこと、読むこと）



4段階評価

（やりとり、発表、書くこと）



研究の一例： 学習者と5技能

□自己評価の偏差値(聞くことの基準にソート)

学生	聞くこと	読むこと	やりとり	発表	書くこと
10	71.6	64.5	55.8	47.7	62.2
2	64.0	54.3	54.2	49.5	46.9
18	64.0	44.0	52.6	60.1	63.9
1	60.1	47.4	63.7	60.1	52.0
4	60.1	64.5	54.2	53.0	46.9
6	60.1	44.0	52.6	51.3	53.7
8	60.1	57.7	51.0	47.7	48.6
24	60.1	47.4	49.4	47.7	62.2
12	56.3	57.7	55.8	51.3	48.6
14	56.3	61.1	36.7	44.2	38.4
3	52.5	54.3	62.2	56.6	58.8
23	52.5	44.0	46.3	47.7	45.2
7	48.6	64.5	63.7	63.7	57.1
11	48.6	61.1	60.6	58.4	65.6

学生	聞くこと	読むこと	やりとり	発表	書くこと
21	48.6	47.4	54.2	69.0	53.7
22	48.6	47.4	54.2	54.8	60.5
27	48.6	64.5	43.1	49.5	40.1
9	44.8	47.4	54.2	58.4	55.4
13	44.8	37.2	52.6	58.4	43.5
16	44.8	50.9	47.8	42.4	46.9
20	44.8	57.7	39.9	42.4	53.7
19	41.0	54.3	62.2	61.9	62.2
28	41.0	50.9	52.6	51.3	58.8
5	37.1	40.6	46.3	42.4	35.0
15	37.1	37.2	24.0	35.3	36.7
17	37.1	30.4	24.0	21.1	29.9
25	33.3	37.2	46.3	38.9	40.1
26	33.3	30.4	39.9	35.3	33.3

研究の一例： 学習者と5技能

□ 自己評価と5技能の相関関係

		聞くこと	読むこと	やりとり	発表	書くこと
聞くこと	Pearson の相関係数	1	.547**	.434*	.381*	.474*
	有意確率 (両側)		0.003	0.021	0.046	0.011
	N	28	28	28	28	28
読むこと	Pearson の相関係数		1	.473*	.436*	.465*
	有意確率 (両側)			0.011	0.02	0.013
	N		28	28	28	28
やりとり	Pearson の相関係数			1	.846**	.733**
	有意確率 (両側)				0	0
	N			28	28	28
発表	Pearson の相関係数				1	.709**
	有意確率 (両側)					0
	N				28	28
書くこと	Pearson の相関係数					1
	有意確率 (両側)					
	N					28

研究の一例： 学習者と5技能

□ 実効的言語能力 ⇒ 実効的言語能力(ELP) = 自己評価(SE) - タスク評価(TE)

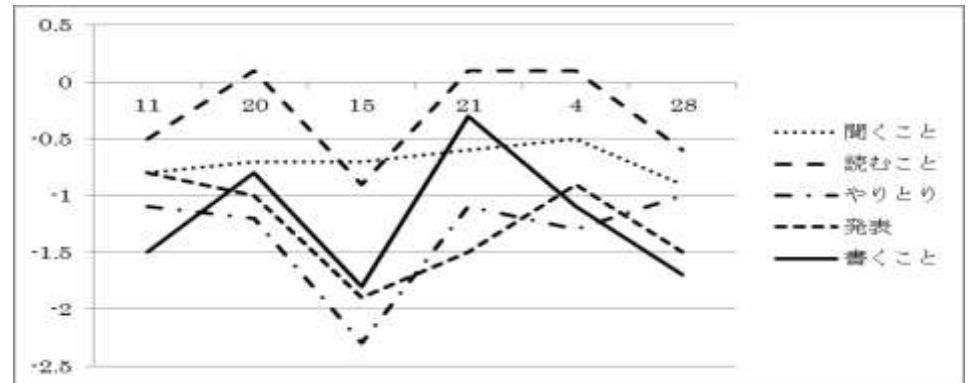
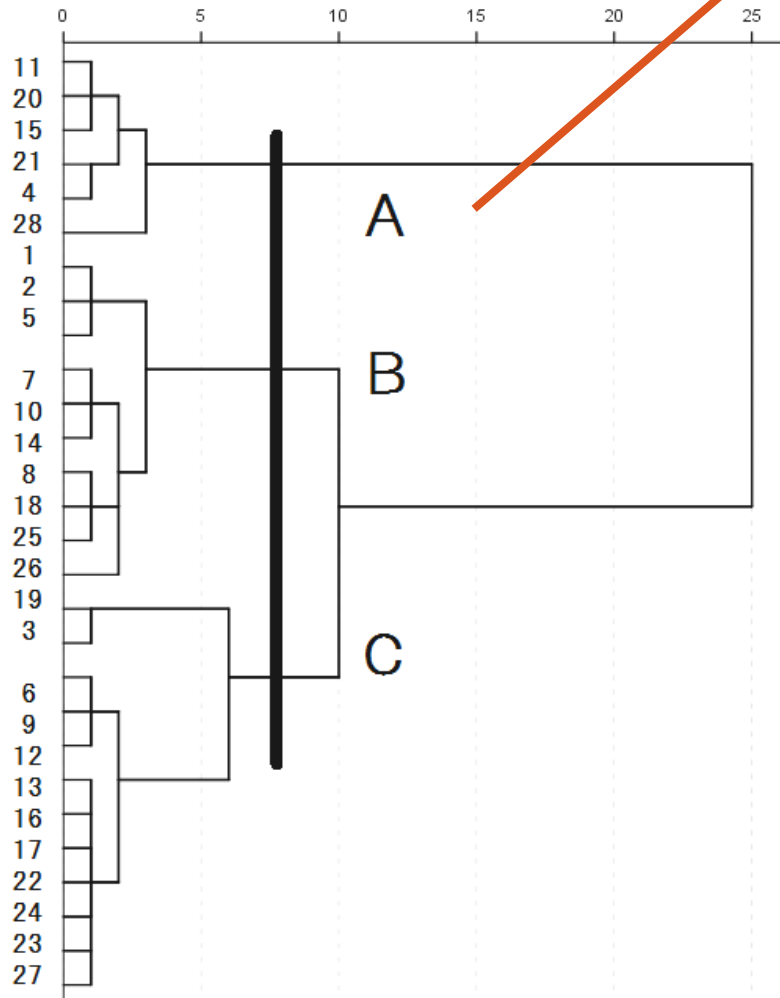
学生	聞くこと	読むこと	やりとり	発表	書くこと
1	-0.3	-0.4	-0.6	-0.4	0.1
2	-0.1	-0.1	-0.8	0	-0.7
3	-0.3	-0.1	0	0.1	-0.4
4	-0.5	0.1	-1.3	-0.9	-1.1
5	-0.8	-0.3	-1	0.3	0.3
6	-0.5	-0.4	-0.3	0.6	-0.4
7	-0.1	-0.3	-0.6	-0.1	0.3
8	-0.4	-0.4	-0.9	0.1	-1.2
9	-0.4	-0.2	0.1	-0.2	0
10	-0.2	0.1	-0.2	-0.5	-0.7
11	-0.8	-0.5	-1.1	-0.8	-1.5
12	-0.6	0.5	0.5	0.4	-0.1
13	-0.3	0	0.4	0	-0.7
14	0.3	0	-0.2	-0.6	0.1

学生	聞くこと	読むこと	やりとり	発表	書くこと
15	-0.7	-0.9	-2.3	-1.9	-1.8
16	0.2	-0.1	0.5	1.1	1.2
17	-0.6	0.3	0.2	0.5	0.2
18	-0.1	0.1	-1.2	-0.4	-1.2
19	0.2	-0.2	0.4	0.3	-0.2
20	-0.7	0.1	-1.2	-1	-0.8
21	-0.6	0.1	-1.1	-1.5	-0.3
22	-0.1	0.1	1.5	0.9	1
23	-0.1	0.4	0.9	0.6	-0.1
24	-0.3	0	0.4	0	-0.1
25	-0.7	-0.4	-0.3	-0.5	-0.6
26	-0.6	-0.1	-0.3	-0.4	-0.2
27	-0.3	-0.1	0.1	-0.2	0.5
28	-0.9	-0.6	-1	-1.5	-1.7

研究の一例： 学習者と5技能

Ward 法を使用するデンドログラム

再調整された距離クラスタ結合



グループA

•「話すこと(発表)」、「話すこと(やりとり)」、
「書くこと」⇒ $-2.5 < \text{ELP} < -1.0$ の数値

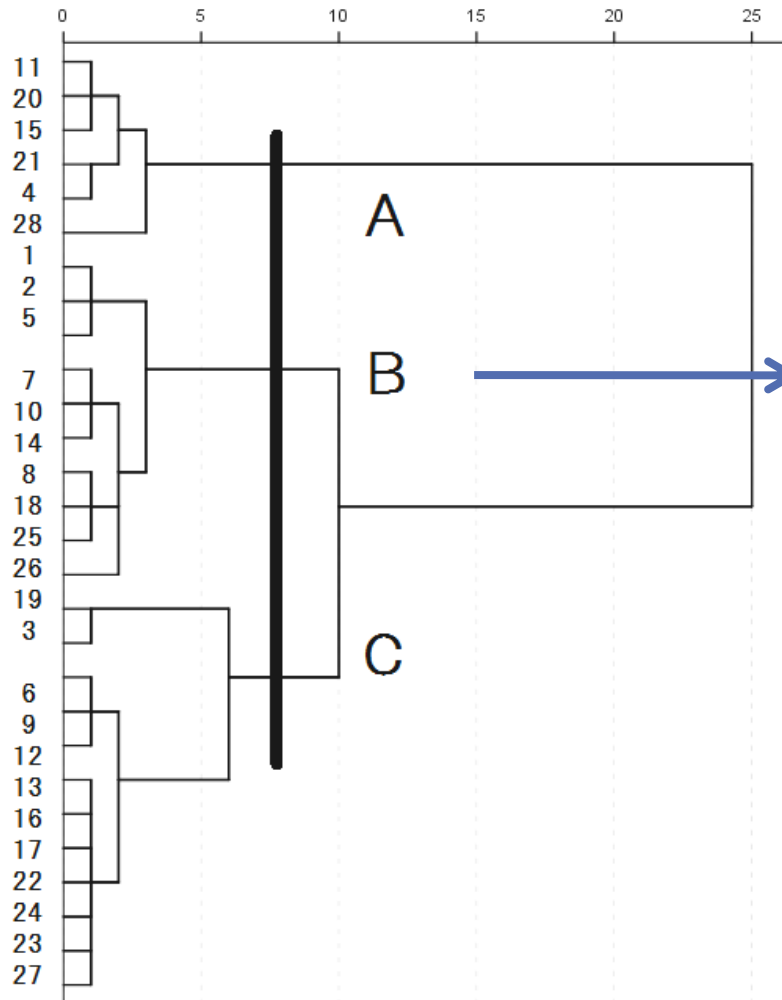
•タスク評価 >> 自己評価

⇒「**自己の言語能力を過小評価する**」学習者

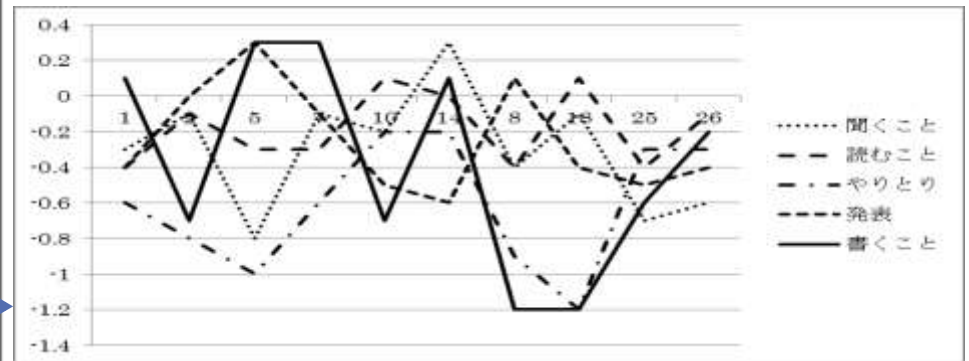
研究の一例： 学習者と5技能

Ward 法を使用するデンドログラム

再調整された距離クラス法結合



グループB



• $-1.2 < \text{ELP} < 0.2$

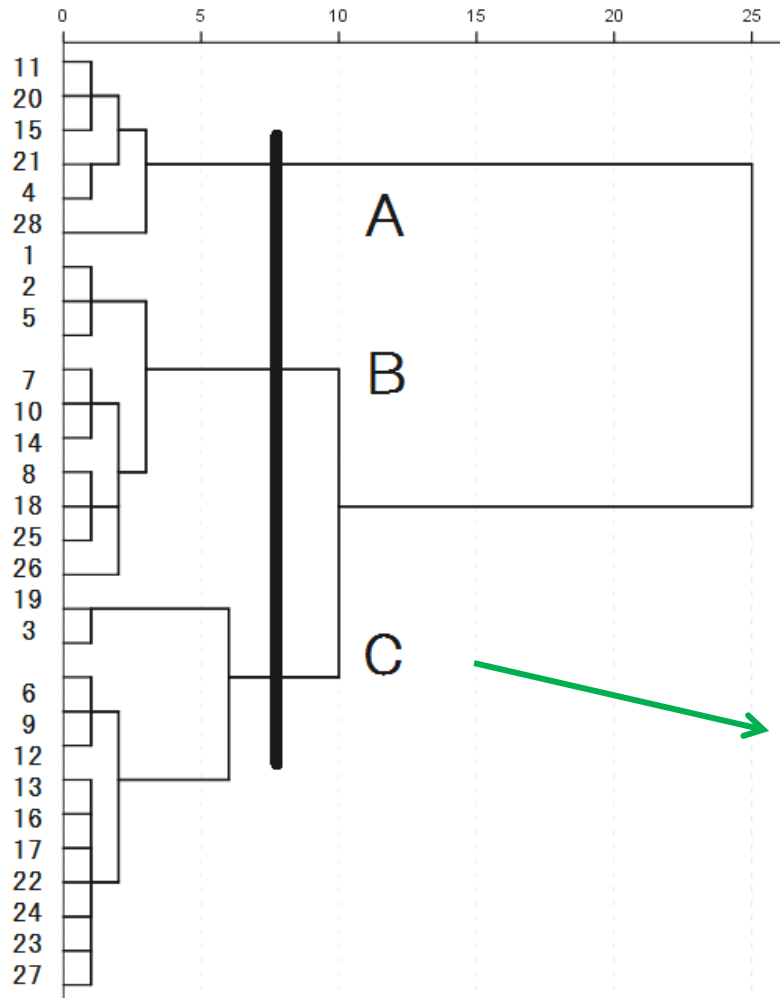
• タスク評価 > 自己評価

⇒「自己の言語能力を過小評価も過大評価もしない」学習者

研究の一例： 学習者と5技能

Ward 法を使用するデンドログラム

再調整された距離クラスタ結合

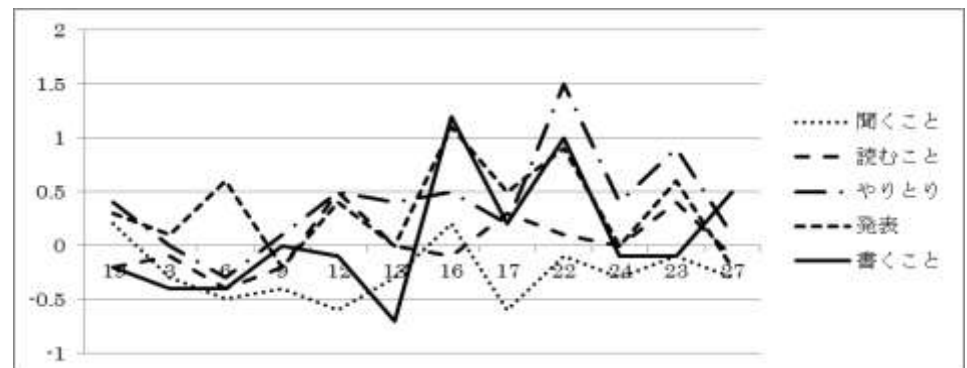


グループC

• $-0.5 < \text{ELP} < 1.5$

• 「話すこと(発表)」、「話すこと(やりとり)」、
「書くこと」⇒タスク評価<自己評価

⇒「自己の言語能力を過大評価する」学習者



研究の一例： 学習者と5技能

□実効的言語能力⇒自己の過小評価 と 過大評価

□学習者のグルーピング

⇒「話すこと(発表)」、「話すこと(やりとり)」、「書くこと」

※「理解(聞くこと)」と「理解(読むこと)」⇒2段階尺度

「話すこと(発表)」、「話すこと(やりとり)」と「書くこと」⇒4段階尺度

今後の課題・展望

□タスクの信頼性、妥当性の検証

□評価の信頼性、妥当性の検証

⇒自己評価、パフォーマンス評価の調査は継続的に行う

参考文献

東京外国語大学投野由紀夫研究室 (2012)「CEFR-J 日本語版 Version 1.1 」 <http://cefr-j.org/index.html> (2013年11月8日最終閲覧)

投野由紀夫(編) (2013)『CAN - DOリスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR - Jガイドブック』, 大修館書店

Negishi, M., Takada, T. and Tono, Y. (2012) A progress report on the development of the CEFR-J. *Studies in Language Testing* 36: 137-165. Cambridge: Cambridge University Press.

補足: **TUFS MOODLE**

<http://mdle.tufs.ac.jp/moodle/login/index.php>